

# 徐勝教授 オーラルヒストリー

聞き手：松本克美 (法務研究科教授)

松本 『立命館法学』の退職記念号に掲載するオーラルヒストリーのインタビューを始めます。

まず、徐勝先生のご略歴とご業績を紹介し、次のようなことをお聞きます。1．日本と韓国に留学された時の研究。2．獄中19年を耐えて、釈放されたわけですが、その後、カリフォルニア大学バークレー校へ客員研究員をへて、98年、立命館大学法学部に来る間の研究。3．立命館大学法学部に赴任した後、韓国の研究者との交流を通じて、研究会、シンポジウムを組織したこと。4．初代センター長として設置した立命館大学コリア研究センターについて。5．今後の抱負。

徐勝先生は、1945年、京都府北桑田郡京北町（旧周山町）に生まれて、1968年、東京教育大学文学部社会学科を卒業し、その年に韓国に留学し、ソウル大学校大学院社会学研究科社会学博士前期課程を修了されて、助手になる矢先、1971年4月18日、韓国の国家保安法違反等の容疑で陸軍保安司令部に逮捕されました。10月22日に第一審判決で死刑判決、1972年12月7日、第二審判決が下され、無期懲役になり、上告棄却で確定し、更に、無期懲役から懲役20年に減刑され、1990年2月18日に釈放されました。この間、獄中19年という大変な経験をして、その後、カリフォルニア大学バークレー校の客員研究員をへて、1998年4月から立命館大学法学部教授として現在に至って、初代立命館大学コリア研究センター長もしました。ご業績につきましては多数のご著書、論文がありますが、ご自分の大変なご経験について、岩波新書から1994年に、『獄中19年 韓国政治犯のたたかい』という貴重なご著書を出されました。翌年、日本評論社から『第一歩をふみだすとき』、2008年には社会評論社から

『だれにも故郷(コヒャン)はあるものだ 在日朝鮮人と私』というご著書も出されています。研究との関係では韓国の問題についていろいろとご著書,ご編著を出されています,法律文化社から2006年に『現代韓国の安全保障と治安法制』,2008年にお茶の水書房から『現代韓国民主主義の新展開』などを出されています。その他,たくさん韓国についてはご著書がありますが,韓国にとどまらず,東アジアの視点からのご著書,ご編書も多数書かれていますということで,2004年に御茶の水書房から『東アジアと冷戦と国家テロリズム 米日中心の地域秩序の廃絶をめざして』,2006年に文眞堂から『東北アジア共同体への道 現状と課題』など多数のご研究を発表されています。

まず日本では東京教育大学文学部で社会学を学び,ソウル大学でも社会学を学んだということですが,なぜ社会学なのか,どういう勉強されましたか。

徐勝 ちょっと誤解がありまして,東京教育大学は昔,東京高等師範学校でした。それが,戦後,改編されました。もともとは旧制中学の先生を養成する学校だったんですが,総合大学になっているんな学科を入れました。東京教育大学は文学部,教育学部,理学部,農学部の4学部の小さな大学だったんです。文学部には社会科学科があって,その中に法政,経済,社会学の3つの専攻に,それぞれの専攻の学生が各学年に20名と,小さかったんです。私は経済専攻です。先生は有名な方がたくさんおられて,東京都知事になった美濃部亮吉さんとか,日本経済発達史の大島清さんとか,統計学みつまの三瀧信邦さんとか,教授,助教てるおかあわせて7名くらいだったと思います。その中で農業経済学をやっていた暉峻衆三先生てるおかのゼミに入って,主に『資本論』の地代論のリーディングをやりましたが,よく分からなかったですね。

私の卒論は「韓国農村の経済」で,伝統的な韓国農村社会の経済関係が,解放後,どのように変わったのかを,隷農的な「モスム」に注目して,農村社会学的な視点で卒論を書きました。その関係もあって,ソウ

ル大学に行こうと思ったのです。私は学部卒業する時に、ニューデリーにあるデリー大学で研究員を募集しているから行かないか、という話がありましたが、結局、行かなかった。私は、高校の頃から在日朝鮮人の民族運動に関心を持って、大学生の頃は「在日韓国学生同盟」に所属し、もっぱら日韓会談反対デモなどをやっていて、勉強はあまりしなかった。自分自身も朝鮮語も、朝鮮の歴史も知らない、これでいいのかと悩み、韓国に行こうと考えました。ところが、私は大学でマルクス主義経済学を学びましたが、韓国は計量経済しかない状態で、農村経済も狭いので。じゃ、農村社会学をやろうと、ソウル大学校大学院社会学科に進みました。そこで農村社会学の勉強もしましたが、関心がもっと大きな社会変動の枠組みに移りました。近代化論批判で修士論文を書こうとしました。松本 東京教育大学に入学された時は、教員志望だったのですか？

徐勝 いや、私はね、松本先生みたいに勉強してないから、教員というのはあまり思ってなくて、大学の頃は、将来、具体的にどういう職につこうと考えなかったんです。私はよくジャーナリストか、政治家向きだと言われますが、社会運動をやろう思っていました。この矛盾に満ちた社会を変えなければ、在日朝鮮人の未来はないと考えたのです。そもそも、1960年代当時は、朝鮮人に大学教員への道は開けてなかったし、もちろん弁護士も会社も大手はだめ、自営業か、あとは医学とか、工学で専門の資格をとる以外に就職の道はなかったんです。私は、理工系はだめだったので、将来は暗澹としていました。暗澹としていた状況を打開するのは社会運動しかない。朝鮮の社会変革に身を捧げようと考えました。ところが、その道筋として朝鮮語、朝鮮の歴史・社会を知らないのだめだから、ソウル大学校に進むことにしました。

日本の大学と全く違って、韓国ではアメリカで学位をとった人たちがほとんどで、日本で学位をとった人は、東大で農村社会学をやった<sup>イマン</sup>李萬<sup>ガブ</sup>甲先生一人くらいでした。あとはソウル大学かハーバードやコーネルで学位をとった先生で、のっけから英書を読まされて、社会調査論を除い

て全部、英語のテキストでした。それで私は生涯初めて、「これは勉強せんといかん」と、心を入れ替えました。2年間、ソウル大学校の社会学科の教授になった韓相震ハンサンジン兄だとか、保険社会部の長官になった、車興チャフン奉兄ボンなど、韓国の友人と一心不乱に勉強しました。友人たちは助手も兼任していて、学科の事務室は我々の研究室のようなもので、毎日夜12時頃まで、そこで勉強したり、友だちの下宿に泊まって、早朝に飯を食べて、学校に出てくる生活を反復して、ようやく読めなかった英語のテキストを読めるようになりました。

松本 京都生まれで、東京に進まれたのはどのような理由ですか？

徐勝 京都の市立堀川高校を卒業したんだけど、入学は府立西京高校でした。勉強はしなかったけど、中学までは、そこそこの成績は出ました。勉強がおろそかだったのは、高校の時に学生運動をやったからです。60年に安保闘争があった時は中3でした。その時に韓国で独裁者、李承晩イスンマンを倒す4月学生蜂起があって、大きな衝撃を受けました。高校に入った時は、プラスバンドもやりましたけど、ほとんど学生運動に明け暮れていました。日本の高校の学生運動をやっている人たちとも関係はありましたが、在日朝鮮人高校生運動に関連していて、ほとんど受験勉強をしなかった。最初は京都大学に進学するつもりでしたが、模擬試験も何も受けてなくて、高校3年の時、これではだめだと、東京に行って早稲田ゼミナールで1カ月、夏期講習を受けましたが、全然、だめでした。校内で模擬試験を受けたら、順位が750名中、200,300番で、進学指導の先生が「あなた、大学に行きますか？」「行こうと思っています」「どこにいくの？」「京都大学」と言えないから、「早稲田に行きます」と答えると、「こんな成績で早稲田に入れますか？」と言われてね。それから卒業するまで二度と進学指導を受けなかった。ようやく受験前の12月の冬休みに入って、勉強始めたんだけど、京都大学は、いくら考えてもむりだし、浪人するのが嫌だったからね。朝鮮人は、どうせ就職もできないのに浪人して、いい大学に入っても始まらなかったし。いろいろ調

べてみると、東京教育大学の文科系は英語，社会，国語の文系科目のウェイトが高くて、数学はあるんだけど、配点が少ないので、私のタイプにあっている。京大よりは、やさしい。国立大学だし授業料が安い。当時、私学と国立の授業料の違いが10対1でした。それに、私の農業経済学も兄の影響が少しあります。兄が東京教育大学の農学部の農村経済学科にいました。入学してから、そうでもないと分かりましたが、兄は「東京教育大学はいい大学だ」と、勧めてくれました。それに当時は珍しく朝鮮奨学会の推薦も若干加味されると、条件がそろいました。それで受験を決めて、滑り止めに早稲田も受けました。なんとか合格して、学生運動にまい進したのです。

松本 大学時代は、もともと経済専攻だったんだけど、農業経済をやる中で社会学的なことを実質的にはやられていたということですか。

徐勝 大学の時はね。それでも学校が小さいからいろんな科目を聴けるでしょ。日本史の家永三郎も、大江志乃夫もいました。哲学の出隆とか、民俗学の桜井徳太郎とか、英語の外山滋比古とか、いろいろ授業があって、好きなものしか出ませんでしたけど、勉強させてもらったと思います。外山先生はおかしな人でね。英語の授業なんだけど、授業中もほとんど英語を使わない。試験問題に英語はない。日本語だけで出す。たとえばイギリスの snobbism について述べなさいという問題がありました。snobbism は英語なんだけど、あとは日本語で、解答も日本語で。「英語は必要ときに辞書を引けば、分かるんだよ」と言っていました。あとはイギリス文化論とか日本文化論ばかりの珍しい英語の授業でした。

松本 それで語学の授業ということでしたか。

徐勝 そうそう。トーマス・マンの本を読むドイツ語の授業では、食べものの話をとても美味しく話す先生がいました。赤ら顔で、お腹が出て、『ドイツのステーキはおいしい、分厚いステーキを食べて、消化するためにドイツ人は濃いコーヒーを飲むんだよ』と。話を聞いて、生唾を飲み込んだことを憶えています。生物学の授業では、問題がB4用紙

に英語だけでびっしり書いてあって、生物は得意だと思っていた私も慌てました。4月に行くと、その先生はイギリス留学中とかで、休講です。5月も休講でした。面倒くさくなって、のぞかなくなったのですが、いつの間にか、授業が始まっていて、試験を受けに行くと、その有様です。面白かったですけどね。

松本 ソウル大学で農村社会学を研究テーマにされたわけですね。

徐勝 そこから移行して近代化論批判で修論を書くつもりでした。当時は「テイク・オフ」という用語を使った、経済成長論者のロストウだとか、日本史のライシャワーだとか、社会学では、ブラックだとかがはやっていました。政治社会学のラルフ・ダーレンドルフも学びました。当時、一番流行っていたのは構造機能主義のタルコット・パーソンズ。そういう近代化論者の理論を読んで、韓国でも風靡しはじめていた成長主義、開発主義中心の近代化論を批判しようと思っていました。

松本 そして博士前期課程を修了して助手になることになったわけですね。

徐勝 韓国は当時は、博士課程がほとんどなかった状態で、修士を終えると、ほとんどアメリカ留学に出るか、助手で残るかでした。私は、修士を終える前に、後に副総理、韓国赤十字総裁になる韓完相先生ハンワンサンの個人助手、「助教」になりましたが、単位取得をして、学位論文を提出する前に逮捕されて、結局、学位はもらえなかったんです。出獄してから後に、学位申請する時に若干、ややこしかったんです。

松本 突然、逮捕されて、19年間の獄中生活を送られたことで、その話は、いろいろ本に書かれていますね。私が、98年4月に徐勝先生と一緒にの時期に立命館大学に赴任して、その後、徐勝先生にソウルにつれていていただいて、その時に徐勝先生が入られていた独房は、ここどとか教えていただきましたね。

徐勝 ソウルソウル大門監獄に行きましたね。

松本 カリフォルニア大学バークレー校に、釈放された後、客員研究員として一時期、おられたとのことですが、そのあたりの経緯とか。何を研

究されていたのかについてお話し下さい。

徐勝 私は出獄して、韓国に少しいて、日本に戻りました。その理由はいろいろあるんですが、韓国政府は、私が韓国から出てくれることを願っていました。世界中から注目されていたので、煩しかったと思うんです。あの当時は、釈放されたものの、どうなるか不確定で、まだ政治犯が韓国にたくさんいて、新たに政治犯も捕まっている危ない状態でした。日本にいる関係者も皆、心配して、一旦戻ってきたんですね。日本に戻って、長期間、監獄にいたから、いろいろな所から講演に招かれました。私の釈放運動は日本で中心的に行われましたが、世界的にアムネスティ・インターナショナルなど人権団体を中心に行われていました。アメリカの釈放運動にかかわったグループ、アムネスティだけではなく、在米コリアンの諸団体、ヒューマンライツ・ウォッチ、KCC（コリア・チャーチ・コーリション：韓国教会連合）、キリスト教人権団体とかから、「アメリカにぜひ一度来てほしい」と要請があったんです。私は一応、前科があって、アメリカ領事館のビザ発給に少し問題があるので、エドワード・ケネディが保証人になって、アメリカに渡航しました。私が釈放された1990年秋、約1カ月にわたってアメリカに、「レクチャーツアー」といっていますが、支援者に対するご挨拶で西海岸から東部海岸まで訪問しました。ロサンゼルスからサンフランシスコ、シカゴ、ボストン、ニューヨーク、ワシントン D.C. を回りました。その折に、いろんなところからアメリカに来てほしいと声がかかりましたが、バークレーのコリアンの大学院生を中心に「ぜひバークレーに来て、勉強しなくていいから、休んでほしい」と招かれました。日本では、当時、しょっちゅう、いろんな人が会いに来て喧騒な状況でしたし、私も長い間、閉じ込められていたから広い世界に出でみたい気持ちもあって、「いいよ」と応じて、バークレーの社会学科に行ったのは極めて偶然です。社会学科の院生たちが熱心だったこと、一応、ソウル大学で社会学を学んだことが縁でした。徳川時代の封建的身分制が日本における社会

経済発展に益したと論じた，“Tokugawa Religion: the Values of Pre-industrial Japan”（日本語訳『日本近代化と宗教倫理 日本近世宗教論』未来社，1962年）を書いた，ロバート・N・ベラー教授，アメリカのエスニック問題，特に黒人問題専門家のトロイ・ダスターとか，台湾研究のトム・ゴールドマンなどがいました。どちらかと言うと，ビジティング・リサーチャー（客員研究員）は学科の飾りものみたいなもので，自らどんな勉強をするのが問題でした。私は，パークレーのアルバニー・ヒルにアパートを借りて住んでいましたが，アメリカやヨーロッパのいろんなところからお呼びがかかって，カリフォルニアに結局2年半ほどいましたけど，実質的に住んだのは1年余りで，あとはずっと旅行していたんですね。アムネスティから招かれて，1カ月半ほど，ロンドン，アムステルダム，コペンハーゲン，ストックホルム，ハンブルグ，ベルリン，フランクフルト，フライブルク，ストラスブール，パリなど，ヨーロッパでツアーしました。中南米からも，カナダからも呼ばれたし，北米大陸の西から東まで往来しました。だからあんまり腰を落ちつけて研究する体勢でもなかった。もう一つは人権問題とかかわって，韓国での拷問禁止運動（Stop Torture in Korea）というNPO法人をパークレーで立ち上げて，人権運動にかかわったりもしました。パークレーでは，コリアンの学生たちを中心にして，南北の対立が厳しかった時代，1991年秋に北朝鮮からも韓国からも人を招いて，朝鮮半島統一フォーラムというシンポジウムを開催しましたが，そこにもかかわって，忙しかったのです。

ただ，その間，見聞したものの，交流したこととかが，あります。91年1月に渡米して，最初にハワイ大学の東西問題研究所（Institution for East-West Studies）からの招聘があって，講演をしました。次にハワイ島のヒロで反戦運動家たちの集会で話をしたんです。丁度，私が，そこからサンフランシスコに行くために飛行機に乗ろうとした日に，アメリカのイラク出撃が始まりました。ホノルル空港は民間機の発着が禁止



されて、飛行機が飛ばずに難儀しました。サンフランシスコに到着するや、ベイ・ブリッジを越えて、30万人ほどの市民たちが反戦デモの行進ですよ。その中で、パークレーの副総長もやった在米コリアン3世の女性で、女性文学をやっているイレーン・キムにも会いました。おじいさんはハワイのサトウキビ畑の労働者としてハワイに来た移民の孫です。リンチー・ワンというパークレーの学生運動出身で、マイノリティ・スタディーズの中国人の先生とも知りあい、いろんなことを教えてもらった。もちろん、韓国学生会（CKS：Committee of Korean Students）や韓国人留学生、韓国人移民者などのコリアン・コミュニティのみなさんには、本当に良くしていただいた。他には、ボストン・カレッジの心理学のラムジー・リムとか、UCLAの中野重治研究のミリアム・シルバーバークとか、ワシントン大学の朝鮮近世史のジェームス・パレとか、朝鮮戦争研究の世界的第一人者であるシカゴ大学のブルース・カミングスとか、ハーバード大学イェンチン研究所副所長のエドワード・ベーカーとか、今は教授になっている、多くの大学の院生たちなど、いろんな方々とつきあわせていただいて、韓国の人権問題、朝鮮半島とアメリカとの関係とかについて勉強させてもらいました。人権法は関係ありませんけど、法一般とは関係のない生活をしていました。

松本 獄中時代を飛ばしたんですけど、獄中でいろいろ勉強されていたわけですね。

徐勝 勉強はね、獄中では検閲制度がありましたから、まず、自由に読みたい本を読むことができなかったのです。それに筆記道具は外部との連絡をするからと、禁止でした。筆記できるのは看守の監視のもとで、手紙を月に1回書くこと、訴訟書類を書く時だけでした。筆記道具所持だけで懲罰です。公的な懲罰だけでなく、暴行を受けます。検房といいまして毎日部屋を調べるんですよ。身体検査をやって、筆記道具が出てきたら、ひどい目にあいます。だから書けないという制約があって、勉強できない。はじめは本の購入は、基本的にはできなかった。外から差し

入れてくれるしかない。母の生存中はね、2、3カ月に一度、重い本を持って、面会に来て差し入れてくれた。監獄の中でくれるのはバイブルと矯正局が出している「パルンキル(正しい道)」という機関誌、政府の広報誌とかしかない。そういうところで体系的な勉強をするのは、ほとんど不可能でした。社会とつくと社会主義の本だと言って、社会科学の本は許可してくれない。許容度が高いのは文学とか、前近代の歴史とか、英語の本は、矯正公務員もあまりわからないから入れてくれるのです。一番厳しく禁止されるのは週刊誌、月刊誌、新聞とか時事系のものでした。『獄中19年』(岩波新書)でも書きましたが、1970年代には思想転向工作の中で、本を一切押収されて読めなかった時期が何ヶ月もあったのかな。非常に苦痛な時期でした。そういう時期を除いても、70年代には外国からの本を警戒して基本的に受け入れてくれなかったから、韓国で出された本を読みました。当時は韓国の学生たちが集会示威法や緊急措置令など違反でたくさん入ってきて、彼らの本を借りて読んだりしました。少し処遇が緩和されてから英語の勉強をしました。薄い本だと、すぐ終わるから、トルストイの『戦争と平和』とか『復活』も読んだかな。『風と共に去りぬ』、『チャーチル回顧録』全5冊とか。キッシンジャー回顧録などを読みました。1日読んでも、50ページも進まないからね。普通に辞書を調べながら読んだりすると、日に10ページもいかない時があって、オックスフォード大学出版部から出たトルストイの、ごつい『戦争と平和』は1月がかりで読みました。そういえば、職員は内容をよく知らないからゴルキーの3部作で『幼年時代』『人々の中へ』『大学時代』という、自伝的3部作を許可してくれて、面白かった。

関心を持ったのは、ついさきほど、亡くなりましたが、民主化闘争の中で有名なジャーナリストの李泳禧<sup>リヨンヒ</sup>先生の書いた鋭い政治評論集や、韓国の最も尊敬される知識人である白樂晴<sup>ベクナクチョン</sup>先生の文学評論でした。韓国近現代史の勉強をしました。また文学を広く読むことができた。私の韓国語はどうしても大学卒業してから学んだ韓国語だから日本語訛りが

あって、発音がよくない。ところがボキャブラリーは韓国で生まれた人に劣らないんです。たとえば草木、鳥魚の名前とか、前近代に使われた言葉とか、監獄でいろんな本を読んだから、比較的良く知っています。辞書で調べながら、有名な朴景利パクギョンニの『土地』24巻とか長編小説を読みました。韓国は大河長編小説があるんです。それが韓国現代史における精神史であり、反権威主義、反独裁の思想の流れが小説にあらわれているんです。

また、官給の雑誌の中から片言隻語を集め、世の中がどのように変わるのかを読み取ろうと、ずいぶん無駄な努力をしました。ニュースを知ったからといって、別に獄中で立場が大きく変わることはないんだけど、合法、非合法の手段で、いろんな情報を集めようと懸命になったこともあります。一番よかったのは普遍的な学問より、具体的な韓国の近現代史、民衆史、歴史学、文学などをたくさん読むことができたことだろうと思います。

松本 時事的なものとか、社会科学の本は全然だめだったのですか。

徐勝 獄中ではね、待遇改善闘争をやりました。時期的に推移があるんですが、外で民主化運動が進展した時には、中でも処遇が緩和される。時期によっては、かなり許容される時期もあって波があるんです。特に1987年、民主化大抗争以後、獄中の待遇が顕著に改善されて、私が出所する2年前には新聞の購読もできるようになりましたが、却ってそれがよくなくて。その頃は珍しいから、本を読まないで、新聞とか、雑誌ばかり読んでいました。新聞を7、8紙取り寄せて読むだけで半日以上かかってしまいます。それで疲れてその後、ゴロゴロして、ちゃんとした本を、ほとんど読まない弊害が出てきました。雑誌とか、総合誌とか、日本でいうと『中央公論』とか『世界』のような本が韓国にたくさんあって、最後の方は、そんなものを読んでいましたね。

社会科学の本で、読んで役に立った本は何か。一般理論は読まなくて、韓国の歴史や現状と関わる本を読みました。韓国で社会構成体論争

が70 80年代に行われていました。日本の労農派と講座派の社会構成体論争の焼き直しのようなもので、さまざまな本が出ました。韓国の歴史を史的唯物論で分析したら、どうなるのか。現在の課題は前近代の封建主義に対して闘うブルジョワ革命なのか、封建的要素はあるとしても、主には資本の支配と闘う労働階級解放革命なのかとか、熾烈な論争があって、話が難しいんです。それと関連して九大出身の韓国農業経済のキムジュン<sup>キムジュン</sup> 金俊輔先生の本とか、韓国における資本主義萌芽としての経営型富農の発達についてのキムヨンソプ<sup>キムヨンソプ</sup> 金容燮先生の大部な研究がありますが、あまり、よくわからなかった。

松本 今、お話を聞くと、獄中、韓国の大河小説を読まれたということですが、そこには韓国の民衆史的な側面もあるわけですか。

徐勝 そうですね。

松本 大長編小説みたいなものは、普通の生活の中で読めないから、それは貴重な経験ですね。

徐勝 貴重な体験だった。パクキョンニ<sup>パクキョンニ</sup> 朴景利の『土地』、ファンソギョン<sup>ファンソギョン</sup> 黄皙映の『張吉山』、チョジョンネ<sup>チョジョンネ</sup> 趙廷来の『太白山脈』などを読みました。最近韓流ドラマの中で、歴史ものは王朝物が中心です。日本は私小説中心だけど、韓国の歴史小説は、私小説めいたものでも、社会性がないと人々は、あまり読まない。少し大陸的なんですね。重要な小説家は、長編小説書いています。そこでは朝鮮王朝末期から植民地時代、分断時代にわたる民衆生活が滲み出てくる。

松本 そして釈放後、カリフォルニア大学パークレー校の客員研究員から、立命館大学法学部教授に赴任されるのですが、その経緯はどのようなものだったのですか。

徐勝 私が出所した後、日本で市民団体が出獄を歓迎してくれました。中でも日弁連や青法協の人たちが関心を持ってくれて、90年7月だったと思いますが、日本弁護士会館の小講堂で講演会をしました。国際法律家協会の人たち、梓澤和幸弁護士、山本真一弁護士、田中重仁弁護士、

大川真朗弁護士などの友人ができました。その人たちと交流があってアメリカに行く前に、韓国の弁護士との橋渡しをして、神戸で日韓弁護士交流会が行われ、日韓の進歩的な弁護士の交流が始まり、アジア太平洋法律家会議につながっていく経緯があったと思います。

なによりも、私が個人的にお世話になり、尊敬している東京第二弁護士会副会長だった小田成光弁護士がおられます。青法協の初代事務局長で、ジェントルで人文学的教養をお持ちで、志が高く、オープンマインドな人です。奥さまを含め、家族ぐるみの接待をいただきましたが、私だけでなく中国人もお世話になった。特にアジアについて関心を持っておられて、皆がお世話になりました。小田先生は立命の畑中和夫先生とお知り合いで、1994年と97年でしたか、中国にご一緒したことがあります。畑中教授は、もともとソビエト法をやっておられましたが、後ほど関心が中国に移って、中国人民大学などと関係を持って、小田弁護士と日中の交流事業をとともにされました。小田弁護士が畑中先生に「徐勝さんは、京都に住んでいるから立命で講義くらい持てないかな」と、もちかけたらしい。畑中先生のお世話で法政特講を、アメリカから帰ってきた94年から始めることになりました。文学部長をやっている桂島宣弘先生（日本史）、彼は東北大学の大学院時代に私の釈放運動をやっていたらしくて、私が立命に来るやいなや、「日本史でもぜひ講義をしてくれ」ということで、法学部と日本史で講義をすることになったんです。

法政特講では私の経験に即した人権論を講義しました。私は日本史が嫌いで、高校の時に選択もしなかった。桂島さんに「何も勉強してなくて、日本史をどうして講義するんですか？」「その方がいい、何でもいいから」と、東アジア論の講義をやったんです。一応、テーマを「反日論」として、朝鮮、台湾の人たちが近現代を通じて日本をどのように見てきたかという講義で、当時の独立宣言文、檄文、一揆の起請文、詩とか文学、新聞の論説などを集めて読ませて、講義をしました。主に韓国だけど、台湾の人たちの植民地時代の日本認識についても講義をし

した。阪大でも同じ講義をやったんだけど、阪大では事務方と合わなくて、1期で辞めたんです。

松本 法学部と文学部で教えられたとのことですが、学生に教えるのは初めての経験ですか？

徐勝 そうですね。ソウル大学にいた頃に学部学生のサブゼミのチューターやったり、先生の代講めいたことをやったり、出所後、講演はたくさんやりましたが、講義は初めてでした。

松本 立命で教えられて学生の反応とかは、どうでした？

徐勝 私自身も教えることについて、あまりよく知らなくて、能力がないこともありましたけど、最初に引き受けた法政特講で、驚いたことに730名の受講生が来て、ひどい目にあいました。他の授業がない時間帯で、先生が甘いらしいと、皆、集まってきたらしいんだけど、学年末レポート課題を真面目に出したんです。「4000字書いてこい」と。夏休み、それを読むのに失明状態になりました。10日間、長野の山にこもって、朝から晩まで、ずっと見ているうちにね、目が見えなくなって。

松本 学生の関心も高かったわけでしょ。

徐勝 当時は釈放当時の報道を知っている人も多く、ある意味ではそうですね。法学部での講義の印象は、わりによかった。学生は、真面目だったし、その中でも今、朝日新聞記者をやっている武田君なんかとは、今でも交流があります。提出されたレポートが650枚ほどで、丁寧に読んでいて、これではだめだと思いましたが、10日間ほど読んでいるうちに、答案がどういうものか、だんだんわかってきたんですよ。パッと目に入る答案があるんですね。字がきれいなだけでなく、「てにをは」が、ちゃんとできていて、論旨が明確で目に入ってくる答案があることがわかってきました。見直してみると、2、3枚、パッと見ただけで「これはできている」と思う答案があった。その一人が朝日新聞へ行った武田君です。この学生は、授業後に私に質問に来ました。「君は学校には来ていますか？」「週に一度だけ。先生の講義だけ出ます」「何しているん

ですか？」「東南アジアとか中国を旅行して、日本に帰ってくるとアルバイトで金を稼いでいます」と。すごいのは、大学3回生の時、1年間休学して、中国旅行をして、チベットからネパールまで徒歩で越えたりしました。4回生の時に、タイとミャンマーの国境にあるカレン族の避難民村で子どもたちに英語で教える先生をやっていましたが、ミャンマーの部隊が攻めてきて、村が炎上した。それを写真に撮って、大学の卒業式の直前に毎日新聞の国際面に写真と記事が大きく出ました。最近では、普天間基地について連載記事を書いています。初めての講義で、もう一人目に付いたのは女子学生で、レポートをパッとみたところ非常に整理されている。論旨も明快で誤字脱字なし、「てにをは」が、皆、合っている。後で聞いたら法学部首席卒業だったそうです。

とにかく、採点でひどい目にあって、これでは体を壊して、やっつけられないと思いました。法学部の学生は、その時も、今も、他学部比べて受講態度は真面目だと思います。ただ、アメリカにも2年あまりいましたし、韓国の大学でも何回も講義しましたが、日本の学生は、あまり先生に食い下がったりしませんね。積極性が無いと思います。私は大学の時、家永三郎先生の講義を一番前で聴いて、最前列で「先生」といって手を挙げて、文句つける生意気な学生でした。日本政治史の松本三之助先生に、アメリカ占領軍時代の戦後改革の歴史的意味をめぐって、文句をつけたこともあります。今から考えると恥ずかしい話で、勉強していないのに生意気に文句をつけていた。汗顔の至りなんだけど、それを通じて教えられるんです。杉正夫先生は地方自治体論ですが、先生のテストで、正反対の意見を書いて、0点をつけられたこともあります。60年代は学生運動華やかかなりし頃で、非学問的に因縁をつける学生もいたけれど、一応、先生たちと渡り合う姿勢があった。今はほとんどなくなったのは、ちょっと残念です。

松本 韓国では、どうなんですか？

徐勝 韓国では先生の権威が高いので、学生は先生に対して従順ですが、

質問とか、意見発表は日本よりは、かなり活発です。しかし韓国も最近  
は日本に似て、だんだん物言わなくなっているらしい。

松本 非常勤をされた後、98年4月から教授に就任されたきっかけはいか  
がでしたか？

徐勝 畑中先生をはじめ、法学部の先生と面識をえるようになったのです  
が、私は、採用の経緯を知らなかったのです。97年に入って、法学部の中  
で、採用の協議が始まっていたようです。いくつかの大学でかかっていた  
のですが、97年7月の教授会が終わってから「立命館で任用する」という話  
がきました。家内と相談しましたが、当時、家内が京大の博士課程にいたし、  
立命に恩義があるし、お世話になることになりました。

比較人権法という課目の担当で任用されたのですが、私の経歴から  
いって、法学とは、韓国の法務部にお世話になったこと以外、縁のない  
人間です。この様な経歴の私を採っていただくことは大きな決断だった  
と思います。しかも、教授としての任用ということです。ともかくも、  
異例のことですので、私は非常に感動しています。法学部の教授の方々が、  
私が法学的な論議はできなくても、体験的な側面から人権が何かを  
語るができるだろうと期待して、任用していただいたと思います。  
私は人生の節目で、4回くらい生死の間を彷徨したことがあり、国家権  
力の暴力性を体験しました。そこを認めて法学部にお招きいただいた。  
私は法学では専門性もないし、『獄中19年』があっても、学術論文とい  
えるものではありません。だから、任用後ですが、学術研究がどうかはと  
もかく、一生懸命、論文を書きましたし、韓国との学術交流に努力しま  
した。

この頃から、日本の大学では、社会経験やそこからの職業的、専門的  
な知識をもった人間を教授職に任用することが始まっています。しかし、  
私は、経過的に皆さんに名前を知られていたかも知れませんが、政治犯  
とはいえ、19年も獄中に入っていた人間を任用するというのですから、  
いろいろと気を使ったでしょうし、この決断をした法学部の見識、末川



先生以来に立命館の平和と民主主義の伝統に感激し、法学部には非常に大きな借りがあると思っています。

私の任用が世間的に公表された 新聞報道されたのは98年になってからですが、日本よりも、韓国の側で非常な反響と問い合わせが立命館の広報課にあり、対応に苦勞されたと、後で、聞きました。ちょうど、偶然ですが、<sup>キム デジュン</sup>金大中さんが大統領になった時期と重なっています。

松本 法学部に教授として任用されて、それまでの非常勤と違って、ゼミを持ったり、いろんな科目を持たれて、どうでしたか。

徐勝 ゼミは面白かったと思います。私のゼミはまだ10年そこそこですが、同窓会も毎年やってくれるし、思い入れを持っている学生もたくさんいて、ゼミはよかったと思います。東京教育大学の時代は小さな大学のゼミだから、ゼミというと、『資本論』とか読んで、合宿では酒を飲んで、「富士の白雪や、ノーエ」と、蛮声を張り上げて、この頃の雰囲気と、大分違います。立命に入って法学部でできることは何か。体験的な話を学生たちに伝えることとともに、日本の学生たちに東アジアの学生との交流をさせることではないかと思いました。学生たちを台湾、韓国、沖縄につれてゼミ旅行をしました。旅行は韓国や台湾の学生たちだけでなく、ゼミのメンバー同士が仲良くなれるものです。平素、会っていても話をしないじゃないですか。夏のゼミ旅行を終えて帰ってくると、格段と雰囲気が違ってくることが、よくわかります。他のゼミのように1泊2日とかではなく、5泊6日とか1週間近くですからね。それが、ゼミ旅行からだんだん大きくなって、沖縄大学、韓国のソウル大学、済州大学、全南大学の先生がたと提携して、冬は日本で、夏は韓国で、年2回、それぞれ「重大な人権侵害」の問題とか、国家暴力の被害の現場に訪れて、そこでフィールドスタディを行い、講義も聴いて交流する、「東アジア平和人権学生キャンプ」をやりました。今年の夏で17回になったんです。今はメンバーから外れましたが、沖縄の学生たちも入って、沖縄と立命、韓国からはソウル大学、済州大学、全南大学、今年の

夏は釜山でやって、東亜大学も参加しました。最近では政策科学部の勝村教授が後継者として引き継いで運営しています。ゼミの学生たちは、キャンプ運営の中心になって、日韓の交流で友だちをつくって、キャンプが終わってから韓国に留学するとか、韓国とか中国系の企業に就職するとか、領事館の職員になるとか、いろいろな進路が開けました。毎年、韓国の大学院に進学する人が1、2名いました。どちらかというとうちのゼミはだいたい法学が不得手の学生が来るんですが、一応、就職はいいんです。学生たちが交流を通じて自己表現能力をつけ、人との接触到に物おじしなくなるし、中心になっている学生たちは、人を組織して問題を解決することを、そこで学ぶ。私のゼミでは、ゼミ創設以来、毎年、学生たちに編集もやらせてゼミ論集を出しています。最近はやっていませんが、一時期までは大原野の山奥の農家と契約して、毎年、たけのこを春に収穫して、秋には肥やしを入れたり竹伐りをしたり、地域住民との交流を10年近くやりました。地域の農民たちの生活と仕事に触れるのは初めての学生たちもたくさんいます。社会との接触、国際的な接触を通じて学生が経験を積んでいき、学ぶことを、ゼミの一つの特色としてきました。学生たちにも強い印象を与えて、愛着が生まれたと思います。

松本 学生にとって、ただ本を読むだけではなく、実際にいろんな体験をして、いろんな人と交流するのは重要なことで、貴重なゼミだと思いません。学生との関係で、東アジア、特に韓国の人たちと交流するだけでなく、研究面でも、法学部に徐勝先生がおられるために、韓国を中心に東アジアの研究者との交流が生まれて、よい成果が生まれていると思います。特に韓国のソウル大学の法学部の先生と徐勝先生が緊密なネットワークを持っておられますから。そういうネットワークは、どういう経緯から生まれてきたんでしょうか？

徐勝 私はソウル大学校大学院社会学科出身で、所属が違いますが、壁を隔てて隣りどうしなので、大学院の頃から法科大学の学生たちとも親しかった。ソウル法科大学の韓寅燮<sup>ハンインソブ</sup>先生と長年プロジェクトをやってき

ましたが、彼は刑事政策の専門家で博士論文も監獄について書いて、私  
が研究対象の一つでした。それと彼自身も学生運動をやっていた共感も  
あって、交流が始まった経緯があります。社会学から歴史学まで、韓国  
で知っている人はたくさんいるんだけど、ここで法学部のお役に立とう  
と思うと、法学者との交流が必要で、ソウル大学校で協力してくれまし  
た。ソウル大学校だけではなく、「法と社会研究会」、「民主主義法学研  
究会」という、韓国の進歩法学をやっている二つの重要なグループが、  
私たちと関係を結ぶ幸運に恵まれて、韓国の公法関係で、若手、中堅の  
進歩的な学者たちと深い交流、筋のいい交流ができたのではないかと  
思っています。

松本 そこでさまざまなシンポジウムが、韓国でも日本で開催されて、  
ネットワークの広がりという点で、徐勝先生が大きな役割を果たされた  
と思っています。

徐勝 もう少し専門的なところで貢献すればよかったんですけど。私の役  
割も、一部はあったかもしれませんが、家族法の二宮周平先生とか、税  
法の三木義一先生とか、独自に韓国とのいろんな交流を持たれて、私が  
立命にきた頃に比べて、韓国と多面的な、各分野での交流が進んでいる  
と思います。非常にいいことです。韓国にも大いに学ぶ点もあります。  
二宮さんがやっておられる女性法など、一部では韓国が進んでいます。  
指宿先生がやっていた情報法も、韓国が進んでいるところもあって、比  
較法的観点から見れば興味があります。

話題は変わりますが、神奈川大学の阿部浩己さんが『国際法の暴力を  
超えて』（岩波書店）という本を出されましたけど、阿部さんがおっ  
しゃっていることは、私が考えていることと、よく似ています。かつて  
非西欧諸国を暴力的に支配した西洋中心の法体系、特に国際法などは見  
直される必要があるという問題提起です。これまで一方通行だったのが、  
逆方向から照射する研究が始まりつつあるのではないのでしょうか。東ア  
ジアにおいては、韓流ブームに代表されるような文化の逆流傾向が始

まっています。西洋文明が日本を經由して東アジアへ伝えられる逆流現象を起こしている。私が編集して、『韓流のうち外 日韓文化の融合と反応』(お茶ノ水書房, 2008年)という本をコリア研究センターから出していますが、法学の分野でも日韓の交流が生まれてきている。中国はこれからの国ですので、印象では学問的には法学とか社会科学の方面では、もう少し基礎をしっかりとする必要があるだろうと思います。韓国は一定の蓄積をその間にきてきて、お互いに切磋琢磨している側面があるのではないかと思います。

松本 私もゼミ生をつれて韓国に何回か行ったことがあります。「ナヌムの家」を学生と訪ねたことがあります。ナヌムの家ができるにあたっては徐勝先生も深くかわられた。

徐勝 ナヌムの家は仏教でつくった日本軍慰安婦のお婆さんのためのシェルターですが、付設の「日本軍慰安婦歴史館」があります。その歴史資料館を創るお手伝いをしました。関連資料を収集するために、沖縄に行って、現地地下壕に入ったり、郷土史学者に会ったりして、歴史館の初期の収蔵品のかなりの部分の収集に協力しました。また産業社会学部の池内靖子先生を代表として、歴史館後援会日本支部をつくって、これまで15年間支援をしてきました。

松本 そういう点でも徐勝先生の役割が大きいと思いますが、東アジアとの交流ということから、立命館大学にコリア研究センターができるに至った経緯についてはいかがでしょうか。

徐勝 先程申し上げたように、私は法学は非専門で、歳もとっていて、学問的トレーニングも正規に受けたとはいえません。学位もソウル大学の修士しかないのに、立命の教員に呼んでいただいたことは、身に余る光栄ですが、他方、忸怩たる思いがあります。学部の仕事もあまりやれていないので、なにか私ができることはないかと考えました。法学部、立命館大学全体との関連で、日本と韓国との関係を研究や文化的な面で橋渡しをしていく役割が、立命に対する恩返しではないかと思いました。私

が非常勤講師の時から、小さな研究会に関わりながら構想してきたのが、教員に採用されてから実現していったのです。特に大久保史郎先生のご指導で、科研基盤研究「現代韓国の民主化と法・政治構造の転換に関する基礎研究」が採択されたことを契機に、本格的な研究が始まったわけです。そこから2006年に、私学としては日本で初めての 코리아 研究センターを設立しました。九州大学に日本で初めて韓国学研究センターができたのが10年前です。

地域研究に関しては、日本と韓国は非常に非対照です。韓国の場合は日本学、日本語の研究課程が120校くらいにつくられていて、一般教養科目以外に専攻の学科として設置されています。大学院課程もたくさんあり、日本学研究センター、日本学研究所が20カ所くらいあります。ところが日本には、ほとんどありません。現在、日本では朝鮮語の科目はありますが、韓国、朝鮮史の専攻課程を置いているところはない。大学院にも、ありません。日本史、東アジア史、東アジア文化論などで特殊講義に吸収されていて、研究所にしても、九大、立命、慶応、2010年、東大ができて、4カ所しかない。来年、早稲田と同志社に作る話がありますが。これは韓国と日本との人口比や、日本に朝鮮研究の蓄積が圧倒的に多いことを考えると異常な状態ですが、朝鮮・朝鮮半島問題に正面から向き合おうとしない日本社会、日本文化の特質の一面を表していると思います。実際、植民地支配責任は21世紀最大の人権問題として提起されていて、私も大きな関心を持っていますが、そのよしあしは離れて、元植民地宗主国の首都、たとえばイギリスのロンドンがアフリカ学の最高のメッカなんです。アフリカ研究するなら、ロンドンに行けと言いますが、日本だけは不思議なことに、朝鮮や台湾研究の学科も研究所も、ほとんど置いていません。中国研究は日本では、それなりに京大、東大をはじめとして、多数あるんだけど、朝鮮研究は、すごく冷遇されてきたと思います。立命は東アジア重視とっていますが、率直に言うと、現状は非常に寒いと思います。立命の研究の特性を東アジア重視と

するなら、立命が朝鮮半島研究で日本で一定の地位を占めることは重要だと思います。関西には在日朝鮮人がたくさん住んでいますし、従来、東アジアとの交流で地理的な有利な条件があって進めてきたので、もう少し、これに注目してほしいと思います。その間は、大久保史郎先生のお力もあって、プロジェクトを中心に韓国政府からの支援もいただいて何とか我々でやってきました。いずれにしても朝鮮・韓国研究の重要性には全く疑いがないので、これを恒久的な研究所に位置づけて、本学の特色として主張できるようなものに育ててほしいと思います。学術研究はもちろん、ご存じのように、今年5回目となる韓国映画祭をやり、市民たちに文化的な交流の場を提供しています。美術展も、コンサートもやったことがあります。いろんな試みが、どういうふうに評価されるかわかりませんが、他学部の教員から一定の支持を得て、関心を持っている先生たちも増えてきています。もう少し大学からも位置づけと支援があればいいと考えます。

松本 こういう貴重な組織をつくられて、徐勝先生は、98年から教授として赴任されて12年、東アジアとの研究・教育上の交流とか、研究センターとか、立命館大学にとっても貴重な成果を残され、立命館だけではなく日本における研究拠点としても大きな役割を果たされたと思います。最後に今後の抱負は、いかがでしょうか。

徐勝 最近、私が関心を持っている問題について話しましょう。お茶の水書房から2004年度に『東アジアの冷戦と国家テロリズム』を編集して出しました。これは冷戦時代における東アジア、特に戦前、大日本帝国が支配した韓国と台湾と沖縄における、冷戦時代の国家暴力、国家テロリズムの実態を構造的に明らかにし、受難者の権利回復を組織する運動を取りまとめたものです。国際シンポ「東アジアの冷戦と国家テロリズム」運動は、1997年、台湾2・28事件の50周年を契機として始まり、2003年まで、東アジアの地域の国家暴力のフィールドをめぐって、シンポジウムを行いました。その後には私がかかわっているのは、東アジア4

地域（日・韓・台・沖縄）の靖国合祀取り下げ運動です。遺族の意思とは関係なしに強制的に合祀されている朝鮮人，台湾人の合祀取り下げ運動をしてきました。法廷闘争だけでなく，毎年，反対集会や研究会を組織してきました。「平和の<sup>ひかり</sup>灯を！ 靖国の間に」東アジアキャンドル行動の共同代表をしています。それは靖国の存在こそが，日本の戦前と戦後をつなぎ，過去を清算をしない日本の土台にあるという認識からです。即ち，かつての侵略・植民地支配を正当化し，「大東亜聖戦」という言葉によって「あの戦争は日本の自衛の戦争であり，東アジア民族解放戦争だった」という歴史認識の過ちを正し，遺族の意思に反する一方的な合祀の取り下げを要求する運動です。人格権，自己決定権の尊重がなされてこそ，日本は民主的な国になり，東アジアとの和解を達成することができるので，靖国問題に集中してきました。

その次に東京造形大学の前田朗先生などと一緒に「東アジア歴史・人権・平和宣言」運動に関わってきました。今年は「韓国併合100年」で，東京とソウルで大きな行事があって，そこからさらに来年9月，「ダーバン宣言」の「奴隷制と植民地支配は人道に反する犯罪である」という趣旨を継承し，特に日本の植民地支配の問題に重点をおいて，東アジア市民大会を開いて，東アジア宣言を出そうと準備を進めています。日本，韓国，東南アジアまで含めて植民地支配が，いかなるものであったか，今，それが，どのような結果をもたらしているかを明らかにし，課題を解決することが，東アジアの連携であれ，東アジア共同体であれ，東アジア諸国との協力に向かって進んでいく前提であることを明らかにし，できれば国連文書にまで位置付け，東アジア問題を考える時に，必ずクリアしないとイケない文書にしたいと考えています。過去の歴史清算だけでなく，現況の人権問題，平和問題まで，すべて現場のNGOたちの主張を集約した形で，アクションプログラムまで提示しようと考えています。

当面，定年を機に，これまでに私が書いたエッセイをまとめて本にし，

多くの方が寄稿していただく退職記念論集とあわせて、日本と韓国の4カ所くらいで私の出版記念・定年記念会をやることになっています。「再出発記念会」と後輩たちは言っていますが、若手の日韓の学者たちが、東アジアの民衆の連帯事業を発展させようと集います。論集には、日本、韓国だけでなく、台湾、アメリカ、カナダの友人たちが一文を寄せてくれます。

その後は、まず、私の家族史とかかわって、植民地と戦後日本を貫流する歴史を本にしようと思っています。次に、東アジアとは何かを、私の過去の論考を中心に発展させ、「私の東アジア論」で本をもう一つ出したいと思っています。あとは、その間の人権論を中心とする私の業績の整理、この3つくらいの仕事を当面の目標にしています。

結論的にいいますと、できるだけ仕事をせず、平穏な生活をしていきたいのが私の願望です。

松本 後始末をする、整理をするというお話でしたが、来年に向けて東アジアの人権の問題について大会を企画するとか、ご著書を3つ、家族史と東アジアと人権論でまとめられるということですね。退職はされますが、今後、ますますご活躍になられるということで、いつまでもお元気で過ごしてください。それでは今日はどうもありがとうございました。これで終わりたいと思います。おつかれさまでした。

(このインタビューは2010年11月17日に行われました)